

梶川 克哉 (Katsuya KAJIKAWA)

学位：博士（文学）

略歴：名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本文化専攻 博士前期課程修了

名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本文化専攻 博士後期課程満期退学

専門分野：日本語意味論、日本語教育

研究課題：日本語の複文表現、意味分析

【論文】

- ・「〈期待未達成〉を伝える『～ものの』の逆接性」（日本認知言語学会『日本認知言語学会論文集』第26巻、2026年3月）
- ・『しぼる』の多義分析」（愛知文教大学『愛知文教大学論叢』第28巻、2026年2月）
- ・『～のに』と『～にもかかわらず』の逆接性」（愛知文教大学『愛知文教大学比較文化研究』第18号、2025年2月）
- ・『たたく』の多義分析」（愛知文教大学『愛知文教大学論叢』第27巻、2025年2月）
- ・『とまる』の多義分析」（愛知文教大学『愛知文教大学論叢』第26巻、2024年2月）
- ・『とめる』の多義分析」（愛知文教大学『愛知文教大学論叢』第25巻、2023年2月）
- ・『旅』の意味分析」（共同執筆）（日本認知言語学会『日本認知言語学会論文集』第22巻、2022年6月）
- ・『あらわす』『あらわれる』の多義分析」（愛知文教大学『愛知文教大学論叢』第24巻、2022年2月）
- ・「逆接『～ながら』の周辺事例的解釈—付帯状況用法との意味的関わり」山梨正明（編）、『認知言語学論考』No.15、（ひつじ書房、2021年5月）
- ・『春』の多義分析」（愛知文教大学『愛知文教大学論叢』第23巻、2021年3月）
- ・「〈表面接着〉から広がる『かける』の多義」、プラシヤント・パルデシ他編『多義動詞分析の新展開と日本語教育への応用』（開拓社、2019年11月）
- ・「メンタル・スペース理論に基づく『～ために』と『～ように』の考察」（日本認知言語学会『日本認知言語学会論文集』第19巻、2019年5月）
- ・『逆接』と中心性」（日本認知言語学会『日本認知言語学会論文集』第14巻、2014年5月）
- ・『目的』と『原因』を表す『～ために』の意味的共通性」（関西言語学会『KLS Proceedings』33、2013年6月）
- ・『XはYでありながらZ』で示す主体属性との非親和性」（日本認知言語学会『日本認知言語学会論文集』第13巻、2013年5月）
- ・「複文表現の意味的カテゴリー —『目的』『付帯状況』をめぐって—」（名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士論文、2012年9月）
- ・『目的』を表す『～ために+移動動詞』と『～に+移動動詞』の比較」（関西言語学会『KLS Proceedings』

32、2012 年 6 月)

- ・『～がてら』の意味分析」(日本認知言語学会『日本認知言語学会論文集』第 10 巻、2010 年 5 月)
- ・「動詞『おす』の意味分析」(名古屋大学留学生センター『日本語・日本文化論集』第 17 号、2010 年 3 月)
- ・『働く』の意味分析」(名古屋大学国際言語文化研究科『言葉と文化』第 11 号、2010 年 3 月)
- ・「現代日本語における『散歩』の意味分析」(名古屋大学留学生センター『日本語・日本文化論集』第 16 号、2009 年 3 月)

【口頭発表その他】

- ・「〈期待未達成〉を伝える「～ものの」の逆接性」(日本認知言語学会 第 26 回全国大会 於：早稲田大学、2025 年 8 月)
- ・「なぜ一つの機能語が異なる用法の従属節で用いられ得るのか—「ために」「ながら」を例に—」(言語科学会 第 25 回年次国際大会 ワークショップ「日本語の機能的表現形式への意味論的・語用論的アプローチ」 於：静岡県男女共同参画センター、2024 年 7 月)
- ・寄稿「日本語世界で共に生きるということ」(長野県警察生活協同組合「旭の友」編集委員会(編)『旭の友』(令和 5 年初秋号)、2023 年)
- ・基本動詞ハンドブック「ふく」の項を執筆(2021 年 10 月 web 公開)(国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」 以下、「国研プロジェクト」と略記)
- ・基本動詞ハンドブック「たたく」の項を執筆(2021 年 10 月 web 公開)(国研プロジェクト)
- ・『旅』の意味分析」(共同研究)(日本認知言語学会第 22 回全国大会(オンライン開催、2021 年 9 月))
- ・基本動詞ハンドブック「あらわれる」の項を執筆(2021 年 7 月 1 日 web 公開)((国研プロジェクト)
- ・基本動詞ハンドブック「あらわす」の項を執筆(2021 年 7 月 1 日 web 公開)(国研プロジェクト)
- ・基本動詞ハンドブック「かける」の項を執筆(2021 年 3 月 15 日 web 公開)(国研プロジェクト)
- ・基本動詞ハンドブック「とまる」の項を執筆(2021 年 2 月 web 公開(国研プロジェクト)
- ・基本動詞ハンドブック「とめる」の項を執筆(2021 年 2 月 web 公開)(国研プロジェクト)
- ・「メンタル・スペース理論に基づく『～ために』と『～ように』の考察」(日本認知言語学会第 19 回全国大会、於：静岡大学、2018 年 9 月)
- ・「名古屋 SKY 日本語学校の取り組み」(ライセンスアカデミー研修会基調講演、2018 年 2 月)
- ・「日本語学校の学生」(高田短期大学教員研修会、2017 年 2 月)
- ・『逆接』と中心性」(ワークショップ「百科事典的意味観の射程」日本認知言語学会第 14 回大会、於：京都外国語大学、2013 年 9 月)
- ・「属性カテゴリーの周辺的事例を示す『～ながら』」(日本語文法学会第 13 回大会、於：名古屋大学、2012 年 10 月)
- ・『X は Y でありながら Z』で示す主体属性との非親和性」(日本認知言語学会第 13 回全国大会、於：大東文化大学、2012 年 9 月)

- ・「認知言語学的カテゴリー観に基づく複文表現の意味解釈 —『～がてら』を例に —」（日本語教育国際研究大会、於：名古屋大学、2012 年 8 月）
- ・「『目的』と『原因』を表す『～ために』の意味的共通性」（関西言語学会第 37 回大会、於：甲南女子大学、2012 年 6 月）
- ・「『～ながら』で示される事態の構成要素的解釈 —『～つつ』との比較を通して —」（日本語文法学会第 12 回大会、於：東京外国語大学、2011 年 12 月）
- ・「『目的』を表す『～ために＋移動動詞』と『～に＋移動動詞』の比較」（関西言語学会第 36 回大会、於：大阪府立大学、2011 年 6 月）
- ・「『～がてら』の意味分析」（日本認知言語学会第 10 回大会、於：京都大学、2009 年 9 月）
- ・「中国人学生とのかかわりを通じて」（愛知産業大学留学生別科特別講演、2006 年 10 月）

【所属学会その他】

- ・日本語教育学会
- ・日本語文法学会
- ・日本認知言語学会（全国大会 実行委員）
- ・表現学会
- ・現代日本語学研究会（主宰）

令和 8（2026）年度ティーチングポートフォリオ

氏 名	梶川克哉	職位／役職	准教授／教務部長
-----	------	-------	----------

1. 教育の理念

外国にルーツを持つ人々との共生社会になりつつある今、日本語という言語共同体に生きる者に今後求められるのは、柔軟性と他者の言葉に耳を傾ける姿勢だと考える。無論、非母語話者が日本語を身につけようとする努力は必要であるが、一方で、母語話者にも、母語である日本語を世界言語の一つと見る高い視座と洞察力が求められるであろう。母語話者・非母語話者問わず、この社会を支える若者たちに対して、これまで日本語教育に携わってきた者として、以上のような素養を身につけさせたい。

2. 教育活動の内容

2024 年度担当科目

ビジネス日本語 A・B、日本語精読入門 I・II、検定試験 N1 対策講座（実践）A・B、検定試験 N1 対策講座（聴解・読解）A・B、ディベート日本語 A・B、ゼミ A・B・C・D
N2 補習授業 A・B

2025 年度担当科目

ビジネス日本語 A・B、日本語精読入門 I・II、検定試験 N1 対策講座（実践）A・B、検定試験 N1 対策講座（聴解・読解）A・B、ゼミ A・B・C・D

2026 年度担当科目（2026 年 5 月 1 日現在）

ビジネス日本語 A、日本語精読入門 I、検定試験 N1 対策講座（語彙・文法）A、検定試験 N1 対策講座（聴解・読解）A、ディベート日本語 A、ゼミ A・C

3. 教育の方法

教師としては、用意された回答を一方的に伝えるのではなく、学生とのやり取りによって答えを見つけていくスタンスを取りたい。担当科目はすべて留学生対象授業であるが、どのような科目であっても、学生とのインターアクションを重視し、実践する。それにより、たとえ日本語能力が不十分であっても、自分自身で考え、発信する能力を身につけさせる

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

教育活動の成果は実技的な科目（「ビジネス日本語」「ディベート日本語」）であれば、パフォーマンスを録画し、確認している。その評価は逐一学生に伝えている。また、言語能力を育成する科目（「日本語精読入門」「検定試験対策講座」）では、日本語能力試験の合格率で成果を判断する。

教育活動の改善は第一に、学生からの授業評価アンケートの回答を検討し、次回につなげている。また、授業後は教案等に改善ポイントを記入するなど、すぐに対応するようにしている。

5. 今後の目標

大学生活の集大成は卒業論文、あるいは卒業研究レポートの執筆と捉える。指導ゼミ生に対しては、その意義を伝え、できることなら、学外の学会等への投稿を射程に入れ、本学での学びを充実したものとさせたい。